

## 読点の事例研究

### —本多の読点論と統語論的読点—

● 村 越 行 雄

#### 1. はじめに

読点は書き手にとって厄介な問題であり、一般学習者向けの作文技術に関する本を見ても、バラバラでどちらに従っていいのか迷うことになり、ますます厄介な問題になっている。すでに別の論文『句読点の方法論的分析』<sup>(1)</sup>において、読点を統語論的基準、意味論的基準、語用論的基準から分析したので、ここではあくまでも事例研究として本多勝一の読点論<sup>(2)</sup>を取り上げて、調べていくことにする。そして、統語論的読点の典型が本多の読点論に見られるという点で、統語論的読点の特徴づけを行うことでもある。

#### 2. 本多の「構文上のテン」

読点について、「構文上のテン」を最重要視し、構文上の重要な読点の役割の侵害を回避する為に重要でない読点を打つべきでないとし、不要な読点を反則の読点とするほど、本多の読点論は統語論的基準という一色に染められたものである。そして、構文上の原則として、「長い修飾語が二つ以上あるとき、その境界にテンをうつ」（略して「長い修飾語」）という第一の原則（130）と「語順が逆の場合にテンをうつ」（略して「逆順」）という第二原則（134）のみを認め、全てを集約化して2大原則という基準にまとめ上げていった。なお、「構文上のテン」以外に、「自由なテン」を認めるが、非常に限定的なものになっている（136）。従って、単純化すれば、読点＝構文上の読点という具合に、統語論的読点の典型と言えるものになっている。

逆順の原則の例として（134）、「渡辺刑事は、血まみれになって逃げ出した賊を追いかけた。」を挙げている。長い順に並ぶ語順が正順で、短いのが前にできれば、逆順になり、従って「渡辺刑事は、」のように、読点を打たなければならないとし、もし正順にして「血まみれになって逃げ出した賊を渡辺刑事は追いかけた。」となれば、読点は必要ないとする。しかし、長い修飾語の原則に従えば、「血まみれになって逃げ出した賊を、渡辺刑事は追いかけた。」という具合に、読点を打ってもよいだろうとするが、「血まみれになって逃げ出した賊を」と「渡辺刑事は」が、「追いかけた」にかかる2つの修飾語であるといっても、後者は節ではなく、しかも長くないので、読点は必要ないとする。

ここで興味を引くのは、第1に、主語・主題に関するものである。一般的には、主語・主題の後に読点を打つ必要はなく、長ければ打てばいいのであって、短ければ必要ないと言われているが、あくまでも逆順の例として、しかも短くても（逆順である以上）、読点を打たなければならないことになる。簡単に言えば、長さに関係なく、主語・主題の後には読点を打つことが必要になる。

第2に、主語と述語に関するものがある。長い修飾語の原則によって、「血まみれになって逃げ出した賊を」と「渡辺刑事は」の2つの修飾語があるので、その間に読点を打ってもよいが、後者が長くない為に必要ないとされ、結局正順の例と同様に、読点のないものになる。そこで、

それを英語に置き換えると、Watanabe police officer chased the bloody criminal who escaped. という具合になるであろう。Watanabe police officer という主語、chased という動詞、the bloody criminal who escaped という目的語の主語→動詞→目的語の語順であり、それを日本語に翻訳すれば、「渡辺刑事は、血まみれになって逃げ出した賊を、追いかけた。」になり、主語という要素、動詞という要素、目的語という要素を構文上明確にさせる為には、2箇所読点が必要になる。最初の読点は、逆順の例としても捉えられるので必要になるが、2番目の読点は、長い修飾語の原則が適用できず、従って必要なくなってしまう。しかし、文の構成要素を構文上で明確にさせるという目的だけでなく、意味論的にも明確にさせる上で、必要になる。英文における目的語は the criminal (賊を) であるが、それに bloody (血まみれになって) と who escaped (逃げ出した) が付加されたことで、長く、複雑になった訳で、1つの意味の単位として他のものから区別する意味で、読点が必要になってくるであろう。

別の考え方として、長い順に従う正順のような日本語特有の語順ではなく、英語などの欧米言語の語順に従って、主語→述語(英語と全く同様に、動詞→目的語ではなく、目的語→動詞になるが)を正順とすれば、他の解釈も可能になってくる。例えば、中村明<sup>(3)</sup>の「文の途中に主部を置いた場合、その前に打つ。」という基準の例である「ぼけがひどくなった老後のことを、私は一晩中考え続けた。」(17)、三浦順治<sup>(4)</sup>の「修飾語句が主文(主語と述語)の間に挟まれるときは、修飾語句を挟んで」という基準の例である「刑事は、血まみれになって逃げる犯人を、追いかけた。」などがある。本多の例、中村の例、三浦の例を比較すれば、類似の例であることは明らかで、ただ読点の打ち方が異なっているだけなのである。それは、長い順を正順にするのか、主語→述語を正順とするのかの相違によるものでもある。

中村の例であれば、「ぼけがひどくなった老後を」が前に出て、主語の「私は」が文の途中に来た為に、逆順(勿論、長い順ではないが)が起きて、読点が必要になったと捉えることができる。また、三浦の例であれば、前掲の英文のような主語→述語(動詞→目的語)が日本語に置き換えられて、主語→述語(目的語→動詞)となり、動詞と目的語の位置変換が起きて、「刑事は追いかけた」という文に「血まみれになって逃げる犯人を」が入り込み、挟まれたような状態になったと捉えることもできる。

類似の例でありながら、読点の打ち方が人によって異なるのは、その人が拠り所にする基準が異なっているからであり、統語論的基準であれば、長い順と主語→述語の語順の相違が出てくる。厳格であるべき統語論的基準が逆に曖昧になってしまったが、むしろ意味論的な基準の方が一致点の多い場合がある。例えば、野内良三<sup>(5)</sup>の意味の切れ目を示す読点の例である「彼女は上の空で、話している彼を見ていた。」と「彼女は、上の空で話している彼を見ていた。」(104)、中村の「文意を明確にするために打つ。」という基準の例である「先生は、あくびをしながら勉強している生徒をぼうっと眺めている。」と「先生はあくびをしながら、勉強している生徒をぼうっと眺めている。」(18)、本多の「渡辺刑事は血まみれになって、逃げ出した賊を追いかけた。」と「渡辺刑事は、血まみれになって逃げ出した賊を追いかけた。」(118-119)などがあり、さらに三浦の分別的読点の例である「ここで、はきものを脱いでください。」と「ここでは、きものを脱いでください。」(103)などもある。基準の名前が違っているということは、それぞれの人が意味するものが異なっているからであるが、意味論的基準という枠内に入るものであることは間違いないことである。

次に、本多の例を挙げて、再び検討することにする。例1「私は人間的な感動が基底に無くて、風景を美しいと見ることは在り得ないと信じている。(『東山魁夷の世界』集英社)」を使用して、

本多は次のような論理的展開を示す(164—167)。最初に、この例の読点は誤解を招くもので、間違えた読点とする。それは、「私には基底に人間的感動がないので、風景を美しいと見るなどできない」ことになるからである。従って、必要な読点がなく、無用な読点があることになる。そこで、読点を移動させる為に、逆順の原則を使用して、例2「私は、人間的な感動が基底に無くて風景を美しいと見ることは在り得ないと信じている。」に改良する。

ここで先に進む前に、例1と例2の関係を見ることにする。これから検討するように、統語論的基準で解釈すると、複雑になり、曖昧なものになってしまうが、意味論的基準で解釈すると、かなり単純な説明で済んでしまう。それは、野内、中村、本多、三浦などの例からも理解できるように、例えば、中村の「文意を明確にするために打つ。」という基準の例である「先生は、あくびをしながら勉強している生徒をぼうっと眺めている。」と「先生はあくびをしながら、勉強している生徒をぼうっと眺めている。」を比較すると、例1と例2が同じ関係にあることが分かるからである。つまり、例1と例2の読点を統語論的読点(本多の言う「構文上のテン」)としてではなく、意味論的読点として捉えることで、説明が簡単になるのである。

話を統語論的読点に戻して、もし2つの読点を打つとすれば、例3「私は、人間的な感動が基底に無くて、風景を美しいと見ることは在り得ないと信じている。」となり、原文の読点(例1の読点)が初めて出てくることになる。しかし、これは構文上のテンの役割を侵害するものであるとする。それは、構文には「文としての構文」と「節としての構文」があり、たとえ原則に従っていても、2つの異なる次元を一緒くたにすれば、節としての構文のテンが文としての構文のテンを侵害することになるからである。そこで、分解していくと、まず「私は」と「人間的な感動が基底に無くて風景を美しいと見ることは在り得ないと」の2つの修飾語が「信じている」にかかり、その内、後者は節となっているので、それを分解すると、「人間的な感動が基底に無くて」、「風景を」、「美しいと」の3つが「見ることは在り得ないと」にかかり、その内の前者は節の中の節になっているので、それを分解すると、「人間的な」と「基底に」の2つが「無くて」にかかり、全体が入れ子になっており、2大原則を各修飾語に適用すると、例4「私は、人間的な感動が、基底に無くて、風景を、美しいと見ることは在り得ないと信じている。」となり、読点が多すぎる結果になる。そして、構文上高次元のテン(文のテン)を生かすためには低次元のテン(節のテン)を除く必要があり、結局例2になる。もし節の読点を打ちたければ、逆順の原則による読点を消して正順にすればいいわけで、例5「人間的な感動が基底に無くて、風景を美しいと見ることは在り得ないと私は信じている。」となる。

以上のように、統語論的基準による説明は、展開が論理的で、厳密であることは確かであるが、長く、複雑で、それだけに曖昧さも残すことになる。今度は、英語との比較で見ることにする。例1は、Since I don't have the base of human deep emotion, I believe that it is not possible to see views beautifully. となるでしょうし、例2は、I believe that it is possible to see views beautifully without the base of human deep emotion. となるでしょう。そして、英文例1と英文例2を比較すれば、日本語の場合よりも、英語における構文上の相違の方がより鮮明に浮かび上がってくるのが分かる。ともかく、英語の構文と同様に、日本語の例1と例2においても、構文上の相違が存在し、それによって意味上の相違が生み出されるという過程が示されるのである。従って、例1と例2の相違は、統語論的に、明確に説明できるのである。

I believe it. のような主語→動詞→目的語という単純な文が、itの代わりにthat節にすることで、I believeとthat節の2つの構成部分から成る文になり、さらにthat節の中でも、it is not possible to see views beautifullyという部分に対して、without the base of human deep emotionとい

う部分が付加された形を取り、2つの構成部分から成る that 節となる訳で、もし文としての構文を重視するのであれば、I believe と that 節の区別を明確化することが重要となり、そのことを読点で示す必要が出てくる。例えば、例2と例5においては、「...、と信じている。」という具合に、「人間的な感動が基底に無くて風景を美しいと見ることは在り得ない」という節が1つのまとまりとしてあり、そのこと（つまり、バラバラではなく、1つのまとまりとしての思想）を私は信じている訳である。この読点は構文上の読点であるが、本多の言う逆順の原則によるものではない。むしろ、論理的な読点と言えるようなものである。例えば、信念のケースでは、信じる主体があり、信じる行為があって信念が成り立つが、信じる対象があって初めて本来の信念が成立する。あること (A) を信じる場合、「私は A を信じる。」と書けるが、A が具体的に何を対象にするのかが不明であれば、信念は成立せず、従って第2段階として、A に関する具体的な記述が必要になり、「A (...)」と書かなければいけなくなる。第1段階の「私は A を信じる」と第2段階の「A (...)」を1つの文の中で表現する場合、異なる2つの段階（本多の言う異なる次元）が混在することになり、その点を明確にして、混乱・混同を回避する為に、読点が必要になってくる。本多は、異なる次元を一緒くたにすれば侵害が起き、それを避ける為には、低次元（節）の読点を除いて、高次元（文）の読点を生かす方法を取ったが、それよりはむしろ、異なる次元の境目に読点を打つ方が重要で、その上で必要であれば、高次元であれ、低次元であれ、読点を打てばいいであろう。その理由は、まず文が単文、重文、複文のいずれなのかを判断できるようにし、その上で文であれ、節であれ、読点を打っていくしかないのであって、非常に長い文や節には、複数の読点が必要な場合があり、低次元の読点を全て削除して、高次元の読点のみを打って処理できないことが起きるからである。例えば、専門書のような非常に長い文で表現する時には、かなりの数の読点を打つ必要が出てくるが、低次元の読点を全て排除するだけで処理できるようなものではないし、短い文に分解すればいいというような単純な問題でもない。

さらに、翻訳のケースを見てみよう。世界で最も難解な哲学者ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』の2.0233を例に取ってみよう。If two objects have the same logical form, the only distinction between them, apart from their external properties, is that they are different. という英文を翻訳すれば、「もし2つの対象物が同一の論理的形式を有するのであれば、それらの唯一の区別は、それらの外的特徴を除いて、それらが異なるということだけである。」という具合になろう。勿論、翻訳者によって解釈の仕方が異なり、翻訳の仕方も異なってくるが、原文を最大限生かすということが目的でなければならない。その1つとして、句読点を維持することが挙げられる。句点というものは、1つのまとまりのある思想の単位（思想の最小単位）として打たれるものであり、原作者は句点ごとに最小単位の思想を表現する訳で、翻訳者が勝手に分解して複数の文にできるようなものではないし、もし句点を無視すれば、思想の最小単位は崩れ、思想全体が狂ってしまうであろう。同様に、読点というものも、最小単位である思想を構成する要素としてあり、構成要素の1つ1つは、単独で、他から切り離されて存在できるようなものではないが、1つのまとまりのある思想の単位（句点とは異なり、思想の最小単位ではなく、思想の構成要素としての単位）であることには変わりなく、従って翻訳者が勝手に読点の位置や数量を変更すれば、原作者が意図した文の構成が台無しになるし、そのことで伝えたかった内容がずれてしまうことになる。本多(135)も、句読点と思想の関係について言及しており、読点を思想の最小単位として、句点を思想のまとまりとして捉えているが、曖昧な点があるので、上記のように捉えた。

英文と日本語訳を比較すれば明らかなように、if を使用した複文の中で、主節と従属節の境目



に読点が打たれ、その主節の中の挿入句には、前後の境目に読点が打たれるという構文上の構成は同一である。つまり、句読点を同一にすることで、原作者が考えた思想の最小単位とその構成要素を守り、意図を反映させることになるのである。勿論、技術的な問題として、句読点を維持することが困難な場合も多く、複数の文に分解したり、文の構成要素の区切りを変更したりして、句点や読点に変更されるのは当然のことである。しかし、翻訳者の判断で句読点を変更することは、反則行為である。

ここで翻訳の問題を取り上げたのは、外国語の翻訳は膨大な数量に達し、いわゆる翻訳語調の日本語を見たり、聞いたりすることが多く、日常生活にまで浸透しており、翻訳語調的文で使用される句読点の影響も大きくなっているからである。しかも、一般的に原文側の統語論的基準に合わせて翻訳されることがほとんどで、句読点もそれに従うことになっているのである。それに加えて、欧米的な思想の影響で、欧米的な考え方をすることがよくあるが、その際英語などの欧米言語の構文に沿ったような形で表現することが多くある。以上の2つは決して例外的なものではなく、ごく普通である以上、日本語の句読点にも反映させる必要がある。というよりは、すでに多くの人たちが実践しているのだから、それらを取り入れる形で句読点を考えることが必要になっている、ということである。

### 3. 問題点

本多の読点論を簡単に検討してきたが、評価すべき点は、言語の土台である構造を対象にして、基準を設定するという統語論的基準によって読点を論じていることである。厳密な読点を求める上では、最適な場所とも言えよう。そして、もし統語論的読点論が確立できるのであれば、有効で、有用な基準になるであろう。しかし、欧米言語と比較して、日本語は構造的にも、論理的にもそれほど厳しくなく、それだけに統語論的読点論を展開しようとする、むしろカバーできないところが生じて、曖昧さを残すことになってしまう。また、異文化接触の影響は、単に語彙レベルで止まるのではなく、文全体の表現形式にも及んでおり、特に義務教育である中学校での英語教育、翻訳語調の日本語の浸透などによって、拡大している。つまり、外来語の氾濫だけでなく、英語文法に基づくような表現形式や句読点の普及が見られるのである。従って、日本語であっても、主語十述語という文法構造に基づく表現形式が可能であるし、現実的に広がっており、例えば、哲学から科学までの様々な専門領域では、英語で論文を読み、英語で書くことが一般化しており、さらに専門家だけでなく、若者から中高年までの層でも、英語文法に基づく表現が一般化しているのである。

もしそうであれば、逆順の原則と長い修飾語の原則の2大原則に全てを集約させることができるのかという問題が起きてくる。言い換えれば、英語文法などの「構文上のテン」をどこまで反映できるのかという問題である。むしろ、別の言い方をした方がいいのかもしれない。実際の日本語の使用状況を考慮すれば、意味論的基準や語用論的基準を求めていく必要があるだろうし、特に現実対応という点では、語用論的基準を設定していくことが課題になってくるであろう。つまり、統語論的読点の限界を知ることが重要であると同時に、意味論的読点や語用論的読点の有用性を知ることが必要である。

注：

- (1) 『句読点の方法論的分析』跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科紀要『コミュニケーション文化』第7号、1～11ページ。

- (2) 今回は本多勝一著『日本語の作文技術』講談社を使用する。
- (3) 中村明著『センスをみがく 文章上達事典』東京堂出版
- (4) 三浦順治著『英語流の説得力をもつ 日本語文章の書き方』創拓社出版
- (5) 野内良三著『伝える！作文の練習問題』NHK 出版